

ミステリ読書案内

2024. 9. 20 発行元

第605号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

ビル・プロンジーニ「ベスト表」(再掲)

『名無しの探偵』で知られているビル・プロンジーニの『ベスト表』を再び取り上げる。私立探偵もので探偵の名前が登場してこないという典型的な「正統派ハードボイルド」の流れに沿った作品群である。

正統派ハードボイルドの

ハメットを読んで、チャンドラーを読んで、ロス・マクドナルドを読んで…。ロバート・B・パーカー…。さて次は誰を読もうかと思った時に登場してきたのがこのビル・プロンジーニ。私立探偵もの。探偵の名前が明かされない…。ところはいかにも正統派ハードボイルドらしい作りなのだが、肝心の探偵がいささか心もとない。煙草の吸い過ぎか、咳が止まらず、癌にかかっているのかと不安になり、調査そのものにも本腰が入れられないような…そんな

スタートだった。『ブラックマスク』などのパルプマガジンの収集が趣味で、プライベート・アイらしさを追い求めている姿はハードボイルド好きの読者には興味を魅かれる設定になっている。

この『ミステリ読書案内』では『ベスト表』は取り上げられず、『代表作』は紹介していなかった。ということで、今回は『名無しのオブ』の第一作に当たる『誘拐』と、短編集の『名無しの探偵事件ファイル』の二冊を取り上げることにした。古書市場では比較的入手しやすい本のようなものである。

《ビル・プロンジーニのベスト表》

1. 殺意 名無し③
2. 脅迫 名無し⑥
3. 失踪 名無し②
4. 誘拐 名無し①
5. 名無しの探偵事件ファイル(短)⑩
6. 死角 名無し⑤
7. 報復 名無し⑮
8. 迷路 名無し⑦
9. 復讐 名無し⑩
10. 暴発 名無し④
11. 標的 名無し⑧
12. 追跡 名無し⑨
13. 亡霊 名無し⑫
14. 奈落 名無し⑭
15. 骨 名無し⑬
16. パニック シリーズ外

他に、コリン・ウィルコックスと共著『依頼人は三度襲われる』や、M・マラーとの共著『ダブル』、ホラー作品の『マスク』など、作品数はそれなりに多い。『名無し』以外の日本語訳は少ない。

「誘拐」

1971年の作。『名無しのオブ』シリーズの第一作になる。私の手元にあるのは新潮文庫1977年の初版。高見浩の訳。巻末の解説も高見浩が書いている。典型的な「誘拐もの」。

オブの「私」はサンフランシスコの事業家であるマーティネッティ氏の邸宅を訪ねる。来るように連絡をもらったからである。マーティネッティは息子のゲイリーが誘拐されたことを告げる。その日の午前中の寄宿制の私立学校にエドモンズと名乗る男が訪ねてきて、マーティネッティの署名のある文書を示して、重大な要件があるので校長に話し、息子を車に乗せていなくなったのだという。その後電話で身代金要求が入ったようだ。オブは警察に連絡すべきと主張したが、マーティネッティは「捜査してほしいわけではない。身代金を運ぶ役目だけをひきうけてほしい」と言った。しかたなくオブは次の日の身代金の運搬に…。思い描いていたような展開にはなかなか…。時々激しく咳込み、肺癌の恐怖を考えたり…。カッコイイハードボイルドの探偵とは少し違う。そして、収集しているパルプマガジンのことが結末に結び付ききっかけになり…。

「名無しの探偵事件ファイル」

1982年に『小説新潮』が直接プロンジーニに働きかけて4回の雑誌連載が始まった。それが新潮文庫に納められたのは1984年。四編の短編が納められた日本オリジナルな短編集となった。アメリカ版が発行されたのかどうかはわからない。

第二話に当たるのが『盗まれた部屋』。プロンジーニはシリーズ第六作の『脅迫』で密室を取り扱っている。「本格もの」のトリックなどにも興味を示していることが窺える。本書第一話の『顔のない声』の読者の感想の中で「トリックの扱い方がややシャープさを欠く」という意見があることが伝えられたので、より完成度の高い「密室」に挑戦した作品に仕上げたようだ。サンフランシスコの新しい事務所に移ったオブの元に古書店主のジョン・ロスマンが訪ねてきた。オブがかつてパルプマガジン千冊を購入した顔なじみの店の店主である。調査の依頼。最近店では盗難の被害が続いているという。最初は稀覯本が多かったのだが、近頃は銅版画、版画、古地図などと値の張るものなくなっている。対策として電子ゲートの感知警報装置を導入したが、高価なデューラーの銅版画が消えた。昼食に出掛けている時間帯で、古書画室には鍵もかけていたという。店員は四人。その時間帯に客は一人もいなかったとのこと。さて、オブの見立てはどうなるか…。